

専念寺通信

専念寺通信

四月号 (NO. 92)

日本列島の南から北へと、順に桜の開花宣言が報道され、関東地方にも、とうとう本物の春がやってきました。専念寺のしだれ桜も三月末からほころび始め、ご覧のようにきれいに咲きました。『通信』4月号をお送りします。

☆お彼岸のご報告

今年のお彼岸は、彼岸の入りの日の前に週末があり、明けの日をひかえてまた週末がある、長い日程のお彼岸でした。お中日には冷たい雨が降り、かなり強い風がふき、全体に気温の変動のはげしい春の彼岸となりました。悪天候にもかかわらず、お中日には80人近い件数の檀家さまがおいでになり、お彼岸の期間を通じて、記帳してくださった檀家さまのお名前は279名にのぼりました！入りの日にご両親が、別の日に長男夫婦が、そして明けのころに次男夫婦がおみえになるお宅もあり、この小さな寺は、先祖を大切になさる本当に心やさしい檀家さまに恵まれていると感じたことでした。少しずつお年を召していく檀家さまと一緒に跡継ぎさんが更に小さいお子さんを連れてみえたり、順に世代が交代している様子もしみじみと感じられました。病気をされ、無事退院して入院中のいろいろなことを話す方、年をとった奥さまのかわりに家事をすべてしているとおっしゃる頼もしい年配の檀家さま、書院にあがってゆっくりおしゃべりを楽しむご一家、今年も、私どもは、皆さまと豊かで穏やかなよいお彼岸を過ごさせていただきました。

☆忘れたほうが良いことと忘れてはならないこと

生きていく上でどうしても忘れられないことがおきます。愛する人の死がそれでしょう。どんなにベストをつくしたとしても、あの時にああすればと、ああしなければと後悔や悲しみは尽きません。「忘れる」のではなく心の中のある場所に丁寧にしまって、その上で前を見て生きていくのが一番よいのだと以前『通信』で、ある僧侶の言葉としてお伝えしました。日常生活でも、頂いた親切は忘れやすく、自分がした良いことばかりをはっきり覚えていたり、短い期間で考える損得に振り回されたり、ちょっとした言葉がいつまでも心にひっかかったり、世間体がやけに気になったり、

私たち人間は、年を重ねても執着するものと手放すものの区別がつきません。自分の身のまわりで起きたことをすべて記憶しようとするのは不可能です。自分の身に起きることを風を受けるように受け、身を通させ、身に自然に残るものを滋養として生きてゆければ浮世もいくらか楽に過ごせるでしょうか。

平成20年4月1日

大黒

